

トラブル IN ベガス

2005(平成17)年9月4日鑑賞(ホクテンザ1)

★★★



監督＝ジョエル・ズウィック／出演＝キム・ベシンガー／ジョン・コーベット／アニー・ポッツ／ショーン・アスティン／デニース・リチャーズ／アンジー・ディキンソン／フィリップ・チャールズ・マッケンジー (メディア・スーツ配給／2004年アメリカ映画／87分)

第2章

映画は楽しめるのが一番！

……これぞ低予算の「B級映画(?)」ながら、ピンクのスーツに身を包んだ金髪の美女キム・ベシンガーの行くところ、次々とエルヴィス・プレスリーのそっくりさんが死んでいくというケッチイなテーマを面白く描いたA級作品。さてそのカラクリと行きつく先は……？ 50万ドルの低予算で2億ドルを売りあげたという『マイ・ビッグ・ファット・ウェディング』(03年)と同じように、さて2匹目のどじょうは柳の下にいるのだろうか？ ところで、こんな映画まで観ている映画評論家は俺くらいなもの……？

エルヴィスは永遠……？

私たち団塊の世代にとって、エルヴィス・プレスリーはビートルズが大ヒットする前の「洋楽」の大スター。ポール・アンカの『ダイアナ』、ニール・セダカの『恋の片道切符』、コニー・フランシスの『バケーション』などを聴き、何とカッコいい曲だろうと思っていたところに、突然登場したエルヴィス・プレスリーは、「不良」というイメージを伴いつつ、魅力いっぱい存在だった。

しかし、否応なく詰め込み受験教育システムの中に身を置かされていた私にとっては、それはほんのちょっとした息抜きにしかならなかったもの。しかし、当のアメリカでは……？

ビートルズがイギリス国民にとって「神サマ」であるのと同じように、アメリカ人にとっては、白人・黒人を問わず、1950年代のエルヴィス・プレスリーはまさに神サマ……？

キム・ベイシングー観たさに……？

大阪府下で唯一この映画を上映するのは、例によって(?)ホクテンザ1。何の前評判もなく、明らかにB級と思われる映画だが、私がこれに注目したのは主演女優のキム・ベイシングーの名前によるもの。金髪美人の彼女は、1997年の『L.A. コンフィデンシャル』で高級娼婦役を演じて強い印象を残した女優。後日、彼女がこの映画でアカデミー賞助演女優賞を受賞したことを聞き、私は大いに納得したものだった。

私には典型的なアメリカ美人に見えるこのキム・ベイシングーをこの映画の予告編で観たときは、かなりマンガ的な映画だと感じたが、それでも観ておこうと思ったのは、ただ1つこのキム・ベイシングーの魅力のため。

パンフレットを読むと、彼女は何と1953年生まれとのことだが、その美しさはなお健在。後述のように、この映画ではピンクのスーツと黒のドレス姿しか観られないのは少し残念。これだけの大女優なのだから、ハリウッドでも、そのファッションセンスをたっぷりと活かして、韓流に負けない感動ドラマを是非作ってもらいたいものだが……？

相棒は？

ピンクのキャディラックに興味を示したことがきっかけで、その車の主であるハーモニー(キム・ベイシングー)のことが忘れられなくなるハンサム男マイルス・テイラーを演ずるのはジョン・コーベット。彼は、50万ドルという低予算ながら2002年にアメリカで公開されるや大ヒットし、2億ドルの売り上げを達成した『マイ・ビッグ・ファット・ウェディング』(03年)でも、ハンサム男の役で登場した俳優(『シネマルーム3』259頁参照)。

この映画を含めて、彼はジョエル・ズウィック監督の下で女を口説くハンサム男役ばかりで登場しているが、私の見立てでは、スーツで覆われた下にある彼の身体の筋肉美は相当なもの……？ したがって、次は低予算映画から脱却し、一転して上半身ムキ出しのアクションものに挑戦すれば、女性客にバカ受けするのでは……？

低予算映画の典型だが……？

この映画は『マイ・ビッグ・ファット・ウェディング』に続く明らかな低予算映画。それは、ジョエル・ズウィック監督自身がインタビューで「最も大きなハードルはエルヴィス・エステイトから許可をもらうことだった」が、「最も難しかったのは予算内で映画に必要なたくさんのエルヴィスの曲を確保することだった」と述べていることから明らか。また、映画を観ていても、主役のキム・ベイシングアの服装はたしかにいい「仕立て」なのだろうが、最初から長い間ずっとピンクのスーツ着のみ。途中、気持ちが切り替わり、「恋の予感」にワクワクしながら、黒のドレスに切り替わるものの、後半はまたこれ一着のみ。

また、相棒のマイルスもきちんとしたスーツを着ているものの、基本的にはこれ一着のみ。もっとも、このスーツは、彼自身が車のトランクの中に長い間閉じ込められたため、かなりボロボロになったようだが、その程度の消耗は想定範囲内……？

もちろん、たくさんの数のエルヴィスの「そっくりさん」のほとんどはエキストラだし、その衣装はすべて安価な貸衣装のはず……？

この映画を観れば、アイデアを明確に立てて企画が通りさえすれば、低予算でも十分面白い映画がつけれることがよくわかる……？

トム・ハンクスも犠牲者の1人……？

この映画では、4人のエルヴィスのそっくりさんが犠牲になり、それにキム・ベイシングア(?)が関与することになる。そしてそれが、前半のストーリー構成の面白さのポイント……？

犠牲者の第1は「燃えるエルヴィス」、第2は「看板下敷きエルヴィス」、第3は「口紅脳天直撃エルヴィス」だが、何と第4の「メールボックス エルヴィス」を演じるのは、あのトム・ハンクス。もっとも演じるといっても、バイクに乗って道路を走っているだけの役だから、オレにだってできそうなものだが……？ そしてこれを「カメオ出演」というらしいが、それは……？

そしてさて、トム・ハンクス演ずる「メールボックス エルヴィス」は一体ど

んな犠牲に……？

アーロン役にも注目……？

この映画でマイルスの部下アーロン役を演じたのは、『ロード・オブ・ザ・リング』3部作（01～03年）で、主人公フロドの旅に同行する忠実な友人サムを演じて注目を集めたショーン・アスティンとのこと。このアーロンは、マイルスと電話で口紅の広告のやり方についての意見を闘わせるだけの役目だが、ストーリーのつながりとしては重要で、ジョエル・ズウィック監督からのお声がかりによって喜んで馳せ参じたとのこと。なるほど、映画ってそんな形でつくられていくわけだ……？

大小2人の捜査官はオール阪神・巨人……？

この映画本来のテーマはハーモニーとマイルスとのラブコメディだが、ストーリー展開はエルヴィスのそっくりさんの連続殺人事件……？　そこで、その事件を追うFBIの捜査官が2人登場するが、これが今や関西の漫才界の重鎮となった「オール阪神・巨人」と同じような大男と小男の2人。次々と変死を遂げていくエルヴィスのそっくりさんの死体（？）の側にはなぜか、ピンクレディ化粧品の口紅が……？

それを手がかりに捜査を進めてきたこのコンビは、口紅のついた唇を写した紙を頼りに、パソコンで合成した犯人（？）の顔写真を持って、ラスベガスで開催されるエルヴィスのそっくりさんコンテスト会場に潜入捜査。その職務の熱心さには感心するばかりだが……？

アメリカでは「おかま」は市民権を……？

次々と目の前で起こる惨劇に怯えながら逃避行を続ける（？）ハーモニーの心の支えになったのは、同じ化粧品販売をしている「おかま」の男性のダーレン（フィリップ・チャールズ・マッケンジー）。

日本ではまだ十分に認知されていないが（？）、アメリカは同性愛者にもおかまにも既に十分な市民権を与えている社会……？　面白いのは、このおかまのダ

ーレンとマイルスとの対話、そしてダーレンと2人の FBI 捜査官との対話。この中で私たちが学ぶべきことは、おかまという偏見を持たず、あくまで対等な人格として向かい合うことの大切さ。そうすればダーレンもまともな対応をするものの、いったん差別的、偏見的発言をしようものなら、その反発は……？

ハーモニーとエルヴィスとのめぐりめぐる縁は……？

ハーモニーの母親ボベット（アンジー・ディキンソン）の職業は自動車の修理工という珍しいもの。そこで、母親が預かり修理していたのが、あのエルヴィス・プレスリーが大好きだった愛車キャディラック。少女時代のハーモニーは、この本物のエルヴィスと話し、エルヴィスが運転するキャディラックに乗せてもらったほどの仲……？ そのエルヴィスが死亡したのは1977年8月16日。そしてエルヴィスの死亡は大きな悲しみをもってハーモニーの母親にも届けられたが、その影響をハーモニーはどのように……？

そんなハーモニーだから、今はピンクレディ社の化粧品のセールスレディとして抜群の成績をあげているが、その営業のために1人車を運転して各地を転々とする生活は全く苦ではない様子。そしてそんな彼女が乗る車はあのプレスリーと同じキャディラックで、その色はピンク色というド派手なもの。

この映画をずっと観ていると、エルヴィスのそっくりさんの死亡にこのハーモニーが関与しているのは、何も今回に限ったことではないということが次第に見えてくる。そしてそれは一体なぜ……？

この映画を観る皆さんには、「親の因果が子に報い……」というおどろおどろしい(?)因果応報の考え方ではなく、あくまでアメリカ流(?)そしてラスベガス流(?)で、明るくそれを分析してもらいたいものだ。

おシャレな結末に乾杯！

エルヴィス映画(?)であるこの映画のハイライトは、何ととっても華やかなエルヴィスのそっくりさんコンテストが展開される舞台。このコンテストにエントリーした以上、出演しなければ怪しまれることに……？ そこで舞台に登場した大小2人の捜査官が演じたエルヴィスの題目は……？ そして優勝の行方は

……？

さらにハーモニーの口から思わず出た「エルヴィスは生きている……」との言葉が突然一人歩きし始めた結果、大勢のそっくりさんたちがとった行動は……？
そしてその結末は……？

ハーモニーが関与したところではエルヴィスのそっくりさんが犠牲になるわけだが、そんな大惨事(?)をお笑いに変え、ハーモニーとマイルスとの恋をハッピーエンドに導く手腕はさすが達者なもの……。

オシャレな結末に乾杯だ。

2005(平成17)年9月5日記

忍に学ぶ「滅びの美学」

9・11総選挙に向けて「刺客」「くの一」の文字が躍ったが、奇想天外かつエロチックな『くの一忍法帖』が日本を席巻したのは60年代で、私が中学生の頃。そのルーツである『甲賀忍法帖』を映画化したのが9月17日公開の『忍 SHINOBI』だ。敵がいなければ存在価値のない忍は、権力(=家康)に操られるままに5人ずつのデスマッチを。そのため、「愛し合う運命」にあった甲賀ロミオと伊賀ジュリエットは「殺し合う宿命」に……。かつての村山知義原作、市川雷蔵主演の『忍びの者』シリーズ(62年～)はリアリズムと社会性が売りモノで、司馬遼太郎原作の映画『鼻の城』(99年)も同じだった。

中国や香港が、かつてのブルース・リーやジャッキー

・チェンのカンフー映画そして近時の『LOVER S(十面埋伏)』(04年)や『セブンソード(七剣)』(05年)の武侠映画が売りモノなら、日本には忍という日本発、最高のエ



ンタメ素材がある。CGやVFXの進歩によって、映像化不可能といわれた山田風太郎の世界だって、今やイキイキとスクリーン上に躍動させることが可能。

また忍なら当然、時代を二分する権力闘争の中に活躍の場が与えられるうえ、空を飛んでも、不思議な術

を使っても、その必然性が認められるはず……？

さらに忍とて同じ人間だから、ラブストーリーの要素を入れこむことも可能。徳川による太平の世を迎えた今、滅びるしかない忍は明治維新下におけるサムライと同じだ。

今やわが国は55年体制が終わって、新たに05年体制が構築されようとし、また政治改革・郵政改革に続く第3の改革テーマが模索されている。財政構造改革・年金改革は当然だが、憲法改正の議論も前原誠司新民主党政党首の登場によって加速されるはず。そんな秋の夜長は、この映画で忍たちの「滅びの美学」を味わいながら、今滅びゆくべき勢力は何かを明確に位置づけ、日本のあるべき将来像を語り合いたいものだ。

(弁護士 坂和章平)

映画

産経新聞 2005(平成17)年9月30日(本書162頁参照)